

# BBS会会長賞

堺市立 登美丘西小学校 六年

小 段 弦 里

## 心のお城に手を差し伸べて

私のまわりには、いじめられた事が原因で学校に来ることが出来なくなってしまう友人がいる。いじめによる不登校は、その本人が悪い事はない。その人に対しての周囲の環境や人間関係が良くないのだ。しかし、だからといっていじめをしている本人に対して、「いじめをしているから」「悪い人だ。」というような軽い気持ちで無視をしたり、キツくあたってみてはいけない。いじめられている人のためだといっても、それをしてしまうと今度は私達が大勢でいじめをしてしまうことになるからだ。実際に、いじめをしていた人が次はいじめられてしまう、という事もある。私は、いじめはこのようにしてループされているのではないかと思う。

また、いじめをしている人が他の人の悪口や陰口を言うのは、その人も何か苦悩や不安があるのかもしれない。いじめをしている人を決して批判する事なく、なぜいじめをしてしまったのかなどをその人にきいてみるのも一つの手かもしれない。しかし、何か事情があったとしてもいじめは絶対に許されていない事ではない。

この事を理解しておき、いじている人にもそっと寄り添うのが大切なのではないだろうか。

今の世の中には、少しでもいけない事をした人をネットやSNS上で誰彼構わず批判するという風潮がある。それが全ていけないといけないわけではない。しかし、何にも関係がない人までもが一人の人を寄つてたかつて叩きまくるといふのは、客観的に見ると、いじめになってしまふのではないだろうか。いじめは、子供の世界だけで起こっているわけではないのだ。

さらに、いじめがヒートアップしていくと、身体に傷をつけられたり、心に刃のように突き刺さる言葉を投げつけられつづけるようになってしまう。私は、NEWSでいじめられつづけた人が自殺をしてしまったという趣旨のものを見た事がある。その時はあまり深く考えていなかったが、これはいじめていた人やそのまわりの人が殺めてしまったともいえるのではないだろうか。そのような時に私が重要だと思うのは、先程のように、まわりの人の対応だと思う。まわりの人がいじめられている人にも心の底から

寄り添う事が出来ればその人にとっても居場所が出来る。いじめられていて人を庇ったら、自分が標的になってしまうのではないか、そんな懸念もあると思う。私もそう思ってしまう時はあった。しかし、私達傍観者一人一人の勇気がたくさんの人にとっては大きな希望となる。例えば、私だと前までいじめられていた友人に対して、「また何かあったら一人で抱え込まずにすぐに言っただけ。」というような事を言った。このようなちよつとした声かけで少しでも救える人もいると私は思う。

しかし、現実ではいじめによって学校に来る事が出来ない人が日本にはたくさんいる。いじめがなくなつてからある程度経た後、学校に来られるようになって、また休んでしまうという人もいる。そんな時、私たち傍観者は「あの子、最近学校に来ないな。大丈夫かな？」と思うだけではない。まず、その問題に関心を持ち、その人を勇気づけられるような言葉を紡いだり、行動をしていくことが重要だ。そして、それが社会を明るくしていくことにつながるのではないだろうか。

人の心は、砂でつくったお城と同じだ。もろく、少しの事でもくずれやすい。他人の手によってすぐに壊す事も出来るが、大きくしていく事も出来る。私はこの砂のお城と同じようにわざとでも誤ってでも人の心を傷つけ、壊してしまったのならその時は素直に謝る事が大切だと思う。そして、砂のお城を直す手伝いをし

なければならぬとも思う。もちろん、余計に傷つけ、壊すような真似をするのは言語道断である。

もし今、貴方のまわりに心の砂のお城が壊され、傷つけられてる人がいるのなら、手を差し伸べてみてほしい。初めは、「大丈夫？」や「どうしたの？」といった声かけや話を聴いてみるだけでも良い。どのような方法でも良いから決して人の砂のお城を傷つけず、壊さないような方法でたくさんの方の砂のお城を直し、大きくしていくような世の中にしていきたい。そうすると、もし自分のお城が壊されてしまった時でも、きっと他の誰かが助け、直していけるようになるだろう。また、いじめられている人も怖いし大変だとは思いますが、自分から助けを求める事はとても大切だと思ふ。もちろん、たくさんの方の勇気が必要かもしれない。しかし、自分から相談しないと誰かが必ず気づいてくれるとは限らない。誰でも自分の身のまわりには必ず自分を受け入れ、そつと寄り添ってくれる人がいる。全員と仲良くした方が良いとは思わないが、希望を捨ててはいけないと思う。

みんなが助け合つて、誰の心のお城も壊さず、傷つけずに、大きくしていく世の中が来る事を私は願っている。誰一人として取り残さない世の中への第一歩をみんなが歩み始めようではないか。